

転機と偶有性

土元 哲平

はじめに

私たちは、新しい環境や人間関係が始まろうとするとき、将来を思って不安に感じることもある。未来の自分がどのような生活を送っているのか、どのようなことを考えているのか、他者とうまくやれているのかといったように、私たちの人生やキャリアは、常に「未定さ」とともにある。とりわけ、人生の転機のような出来事は、思いがけず生じることがあり、事前に予測して対応できるようなものではない。キャリアにおける「未定さ」は、「偶有性」(コンティンジェンシー, contingency) と言い換えることができる。偶有性という概念は、社会システムについて論じる際に、社会学者のパーソンズ (Persons, 1951/1974) やルーマン (Luhmann, 1984/1993) も重視したものである。ルーマン (Luhmann, 1984/1993) は、偶有性を以下のように説明している。

コンティンジェントなものは、必然的でもなければ、不可能でもないものである。したがって、ことがらが現にある(過去にあった、今後あるであろう)あり方は、そのようにあることが可能であるのみならず、またそれとは別様にあることも可能なのである。したがって、コンティンジェンシーの概念は、現に存しているもの(経験されるもの、期待されるもの、想定されるもの、空想されるもの)について、それとは別様のあり方を顧慮したうえでその特徴を把握している。言い換えるとこの概念は、それぞれの対象を、おこりうる変化の地平において捉えている。コンティンジェンシーの概念は、現に存している世界を前提としているのであり、したがって可能なもの一般ではなく、この現に存している世界というリアリティからみて、別様にありうるものを言い表している。

(Luhmann, 1984/1993, 邦訳, p.163)

サトウ (2012) によれば、contingency という語は心理学では随伴性と訳されているが、科学社会学や脳科学の分野においては、偶有性という訳が定着しつつある。文化心理学の観点からは、偶有性は、私たちの人生径路上の選択は、偶然でも必然でもなく、歴史的-文化的な文脈に埋め込まれていること、また、そうであるがゆえに、他の選択をしたり、新たに選択肢を創り出すことも可能であるということの意味する(サトウ, 2012; 安田, 2015)。今回は、このような偶有性と転機の関係について考えたい。

生きられた経験、有意味な経験

本稿では、文化心理学者ブルーナー (J. Bruner) の「意味づけ」(meaning) 概念を参考にする。ただし、それに先立って、この考え方の前提となる「経験」の考え方について、現象学的社会学者シュッツ (Schutz,

A.) の『現象学的社会学』（邦訳, Schutz, 1970/1980）に基づき説明する。この「経験」という言葉は日常的に用いられているが、心理学や社会学においては2つのレベルで区別されることがある（図1）。

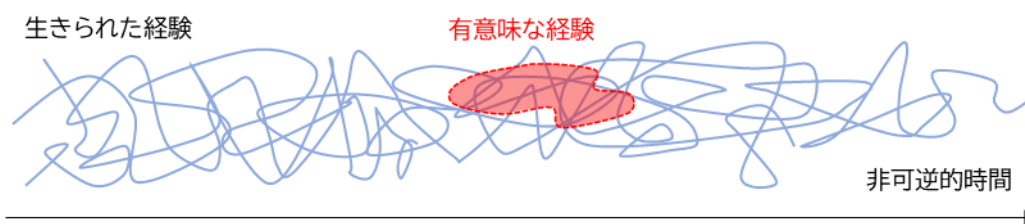


図1 生きられた経験と有意義な経験

まず、第1のレベルは、まさに私たちが「今—ここ」で直接向き合うような経験を指す。私たちは、歩いている時や音楽を聴いているときなど、「今起こっていること」を、特に意味づけをせずに、身体的に感じているような場合がある。このような出来事は、何らかの意味あるものとしてというよりは、すぐに過ぎ去っていく、流れていく経験として感じられる。シュッツは、このような「相互に区別なく融けあっている経過しつつある経験」（Schutz, 1970/1980, p.15）を**生きられた経験** (lived experience) と呼んでいる。

しかしながら、私たちの経験は、すべてが「相互に区別なく融けあっている」経験ではなく、区別され、意味がある出来事である。第2のレベルは、このような「互いに区別されたすでに過ぎ去った過去の経験」（Schutz, 1970/1980, p.15）としての**有意義な経験**である。例えば、何気なく聞こえてきた音楽に気づき「この音楽を聴いたことがある」と思ったり、道を歩いているときにふと「この場所は好きだ」と感じることがあるが、私たちは「この音楽」「この場所」というように、特定の経験を他の経験と区別して捉えることができる。ここで、シュッツ（1970/1980）によれば、ある経験を他の経験と区別するや否や、その経験は過去のものとなる。このように、私たちは、はじめは区別されていない「生きられた経験」に対して注意を向ける（反省的注意）ことで、その経験を意味ある、まとまった経験として理解することができる。

意味づけ

ブルーナーの「意味づけ」という考え方は、以上のように、人間が経験を区別し、意味を持たせるという前提の上に成り立っている。「意味づけ」とは、簡潔に言えば「経験の組織化」（organization of experience; Bruner, 1990/2016; やまだ, 2021）であり、**ナラティブ**（ものがたり）を生成することである。シュッツがいうところの「有意義な経験」を生成するプロセスと類似する。ここで「類似」という表現を用いるのは、「意味づけ」という概念の主眼は、前提や常識、通例性の破壊として定義される**トラブルの発生**（＝**例外的事象**）に相対した精神が、どのようにその出来事を意味があるものとして理解可能とするのかという、「混乱と修復のダイナミズム」の探求にあったからである（横山, 2019）。例えば、ブルーナーは『意味づけの諸行為』（*Acts of meaning*）という著書の中で、次のような例を挙げている。

¹ ここでの「反省」は、「自分の行いを反省する」というような、一般的意味とは異なる。シュッツ（1970/1980）によれば、私たちは生きられた経験の流れ（持続）の中では、「今このように」から「今このように」への絶え間ない移行を経験しているが、反省という態度には、そのような経験の流れを「さっきこのようであった」という（過去の）記憶（Erinnerung）に変化させる作用がある。

もし、誰かが郵便局に入ってきて、星条旗を広げて振り始めたら、それを見たあなたと同じフォークサイコロジー²を共有する対話者は、あなたの疑問に答えて言うだろう。おそらく今日は自分が忘れていた国民の祝日か何かだろうとか、また、アメリカ在郷軍人会の地方支部が基金募集を行っているのかもしれないとか、あるいはただ単に、旗を持った男は、今朝のタブロイド判の記事に想像力を刺激された、ある種のいかれた国家主義者であると (Bruner, 1990/2016, p.70)

上記の例のように、日常生活の中で「郵便局に入ってきて、星条旗を振る」ということは、常識的には起こりえない。このように既存の常識では理解できない、例外的事象が生じたときに、私たちは、その意味や理由を模索しようとする。このような出来事は、ライフコース上では「**転機**」として生じる。その人にとっての「当たり前」とは大きく外れるような出来事(ライフイベント、対人関係、震災、病気、など)が生じたときに、私たちは生きる意味を探求したり、自分にとっての前提を問い直すといった「意味づけ」が必要になってくる。したがって、転機とはナラティブである(杉浦, 2004)。

最後に、この「意味づけ」が文化的なものであるという点を強調しておきたい。出来事を意味づけるということは、ものがたりを生成することに他ならない。ものがたりは、ブルーナーによれば「正当とされる文化パターンからの逸脱を緩和し、あるいは少なくとも理解可能にするような意図的な状態を見いだす」(Bruner, 1990/2016, p.71) 機能を持っている。ここで意図的な状態とは、主人公(上記では、旗を振っている人)にとっての信念、欲求、希望などである。つまり、あるその出来事がその人(集団)にとっての規範や習慣(文化的な産物)から逸脱している場合に、それが例外的な事象、驚くべき出来事としてみなされるのである。このように人間の意味づけは、個人の意図的な状態だけでなく「文化」とも深く関わっていることから、ブルーナー(1990/2016)は、意味を中心に据えた心理学(文化心理学)の重要性を強調した。

偶有性と転機

さて、偶有性と転機との関係を考えたい。転機においては、「予期せぬ出来事」(白井, 2010)や突発的出来事(rupture; Zittoun, 2006)といった、その本人が想像もしていなかった「例外的事象」を含んでいる。

なお、例外的事象と転機との関係については、次のようになる。筆者は、図2に示すように、転機を、例外的事象を含むかたちで意味づけられたナラティブであると考えている。例えば、「受験で大失敗する」ことが例外的事象であるとすれば、そのような例外的事象がなぜ例外的であったのか、どのように理解可能なものとし、乗り越えたのかという「意味づけ」全体が転機となる。つまり、「受験で大失敗する」という例外的事象だけを転機と呼ぶのではなく、その出来事が生じた文脈をすべて含めて転機と呼んでいる。

² フォークサイコロジーとは、簡潔に言えば、個人の欲求や信念の体系を指す (Bruner, 1990/2016)。

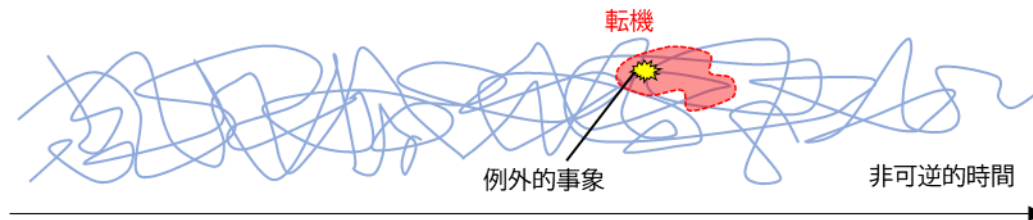


図2 例外的事象と転機

さて、このような例外的事象は偶然に生じるようなものだろうか。この点について、便宜上、転機を経験した「個人」と、その人に関わる「社会」とのそれぞれから考えたい。

まず、「個人」の側から見れば、ある出来事が例外的事象であると認識できるのは、その人自身である。一般的に転機になるとみなされるような出来事であっても、本人がその経験を「例外的事象」とみなさなければ、それは転機に結びつかないからである（土元・サトウ, 2019）。例えば、結婚が転機になる人もいれば、むしろそれは一つの通過点であって、パートナーとの関係性は大きく変わっていないという人もいるだろう。次に、「社会」の側から見たときには、例外的事象は、文化や社会によって人生径路が方向づけられたことで生じる側面がある（Sato, 2017）。出来事は、私たち人間の関係性の中で生じるため、完全にランダムに生じるのではなく、集合的文化による制約を受けている。くじ引きや抽選のような出来事であっても、「抽選に参加する」という行為や「抽選で何かを決定する」という規範は文化的であるし、当選した結果として得られるもの（賞金や景品、機会など）も、特定の社会によって価値づけられている。

以上から、転機は、ある出来事を認識し意味づける個人と、人生径路をガイドする社会・文化とのあいだで生じる「個人と社会との相互作用」（土元・サトウ, 2019）によって生み出されるという意味で、偶発的な出来事である。「偶然の出会い」「思いがけない出来事」と考えていた経験が、いかに歴史的、文化的な流れの中で生じていたのかを理解することは、メンタリングやキャリア教育においても有用であると考えられる。

引用文献

- ブルーナー, J. S. (2016). 意味の復権——フォークサイコロジーに向けて(岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子, 訳) (新装版). ミネルヴァ書房. (Bruner, J. S. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge: Harvard University Press.)
- ルーマン, N. (1993). 社会システム理論 (上) (佐藤 勉, 監訳) . 恒星社厚生閣. (Luhmann, N. (1984). *Soziale Systeme. Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp Verlag Frankfurt an Main.)
- パーソンズ, T. (1974). 社会大系論 (現代社会学大系14) (佐藤 勉, 訳) . 青木書店. (Persons, T. (1954). *The Social System*. The Free Press.)
- サトウタツヤ. (2012). 理論編——時間を捨象しない方法論, あるいは文化心理学としてのTEA. 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEMでわかる人生の径路——質的研究の新展開 (pp. 209–243). 誠信書房.
- Sato, T. (2017). *Collected Papers on Trajectory Equifinality Approach*. Chitose Press.
- シュッツ, A. (1980). 現象学的社会学 (文化人類学叢書) (森川眞規雄・浜 日出夫, 訳) 紀伊国屋書店. (Schutz, A. (1970). *On Phenomenology and Social Relations*. The University of Chicago Press.)
- 白井利明. (2010). 人生はどのように立ち上がるのか——「予期せぬ出来事」 に着目して. 心理科学, **31**(1), 41–63.

杉浦 健. (2004). 転機の心理学. ナカニシヤ出版.

土元哲平・サトウタツヤ. (2019). 転機研究における「個人と社会との相互作用」のアプローチ. キャリア教育研究, 37(2), 35-44.

やまだようこ. (2021). ナラティブ研究——語りの共同生成（やまだようこ著作集第5巻）. 新曜社.

横山草介. (2019). ブルーナーの方法. 溪水社.

安田裕子. (2015). 未定と未来展望. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編——複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp. 41-45). 新曜社.

Zittoun, T. (2006). *Transitions: Symbolic Resources in Development*. Information Age Publishing.

バックナンバー

- 土元哲平. (2021). 「よいリハビリテーション」メタファーとキャリア教育（キャリアと文化の心理学（7））. 対人援助学マガジン. 48. pp. 267-275.
<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol48/51.pdf>
- 土元哲平. (2021). へき地小規模校で学ぶ意義について考える：「オートエスノグラフィックな発達」概念を手がかりに（キャリアと文化の心理学（6））. 対人援助学マガジン. 47. pp. 273-275.
<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol47/51.pdf>
- 土元哲平. (2021). 職業指導からキャリア教育へ（キャリアと文化の心理学（5））. 対人援助学マガジン. 46. pp. 278-281.
<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/45.pdf>
- 土元哲平. (2021). 小学校におけるキャリア教育：「役割」を介したオートエスノグラフィックな発達（キャリアと文化の心理学（4））. 対人援助学マガジン. 45. pp.318-322.
<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol45/52.pdf>
- 土元哲平. (2021). オートエスノグラフィックの特徴と主流の方法論（キャリアと文化の心理学（3））. 対人援助学マガジン. 44. pp.261-263.
<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol44/51.pdf>
- 土元哲平. (2020). 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィック（キャリアと文化の心理学（2））. 対人援助学マガジン. 43. pp.287-299.
<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/52.pdf>
- 土元哲平・サトウタツヤ. (2020). 教育・発達心理学とキャリア教育の接合（キャリアと文化の心理学（1））. 対人援助学マガジン. 42. pp.288-303.
<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol42/51.pdf>